百人女郎品定

西川祐信画

ヲ6
3381
1

百人女郎品定

志ゐ さだめ

繪草紙

西川筆

ISSEIDO
田神 成 南車
¥3.00
2冊
8年4月8日

門 ヲ6
號 3381
卷 1

百人女郎品定二卷は西川祐信の筆にかゝる世に有名なる物なり
上は女帝皇后皇女を始め奉り公卿并に武家の室より下は百姓
町人の女房工女および遊女等にいたるまで目錄に掲くるごとく
ろすべく一百圖を悉く畫記各解說を記したるものなれども
女帝皇后皇女の御畫は憚あるべきもの多く省略したるを觀者られば
諒せよ此の書は享保八年の出版に係り
西川祐信は通稱を右京といひ自得齋自得叟また文華堂と號す
京師に住し始め狩野永納の門に入り畫法學ひ後人情に一家
成し大和繪師と稱し其の畫くところは繪本大に世に行なる
ものなりしなれども世に知るべきものなり寶曆元年歿し年八十一

序

禁庭の百官百寮の座紙
わうこうの。さ紙より百數の大文
人をは例はぐるべ。美女の百
乃媚ある。貴妃を有髮の花
や美しい。さを唐土美人

大涙乃美蓉未央の柳。梨花海
棠の衣の秋乃美事。いとゞ容色乃
さらはなし。我日の本いにしへ女の
風情も先ぐさ。くゝあ雲乃上の
そくやんごとなしいわぎそかぞ
ふいはあらぶ。うれしら紙乃賤
やしきたぐり。紡績をいとゞ民の
家の下司女。傾国の女の色を彷
まゝ道にいわゝ孫ど。女職の業小家
比丘尼。花鳥の新まで巻の末つくゝ。
西川氏ど筆削をうゝ。古今女中の
絵詞草とかゝ今事紙孫ぐふう。乃
那のさぐいいあれど。元百彩ゝ淮じ事。
よぐさ百人女命と外題を。添よ

詞の花のさかりはげんい世
をうつす鏡の面ちまべ

享保ハッの年はるの春

花の盃まき

八文字自笑謹序

大和畫師
西川祐信

百人女郎上之巻　目録

○女帝　○皇后　○皇女
○内侍　○典　○おとゝ
○尼法師　○斎宮　○おわゝ子
○采女　○女嬬　○半
○公卿室　○公卿姫　○乳
○女官　○女中　○神職室
○神職娘　○神子　○同下女
○武家室　○同姫　○四位局

○女俳諧　○女醫　○沛髮採
○女右筆　○女工　○瞽女
○舞子　○町人上臈室　○さるまね
○有徳人室　○町人中臈室　○嵩人妻
○扇屋打子　○紙屋女　○麻子結
○綿搗　○縮物師　○牙婆
○衣屋　○まゝ師　○糸繰
○横匠　○白川石賣　○矢背まゝ賣
○大原柴賣　○百姓女房

以上

○女帝

人皇十五代神功皇后を始めとし。
まゝ孫も即位いたせば。胎中の御子
應神天皇也。あり摂政し給へ。三十
四代推古天皇迄即位の始めとし。聖徳太
子摂政し給へ。女帝中比稀也

○后

もろ〳〵上下ともに妻といふ。異國にては漢
の高祖より皇后といひ。日本にては
神功皇后とけがしたまふなり。まづは
中宮といふ。下ともろ〳〵でいふ。日本人皇
の始め神武天皇。吳ふしてへ國の家より
こしをいふ。中宮皇后ともに天子の妻をもいふ

○姫宮

天子の姉妹ならびに院の御乃御女を
皇女といふ。姫宮ともいふ也。内親王宣下と云
ふ也。内親王い後日本紀よ。元明天皇吳
亀年中に。一品に高の内親王をけがした。
位階相當親王ハ同じ。姫宮といふ天子の孫
彦まぐ也。その孫ぐいつる女御女也

○斎(いつき)

伊勢(いせ)ハ斎宮(さいくう)加茂ハ斎院(さいゐん)也。人皇(にんわう)十二代の帝(みかど)垂仁天皇(すいにんてんわう)。倭姫(やまとひめ)を伊勢(いせ)の斎(いつき)とし。延喜式(えんぎしき)第五ニ天皇即位(てんわうそくゐ)のはじめ。未嫁(みか)乃姫宮(ひめみや)を嵯峨(さが)乃野宮(のゝみや)にて御禊(みそぎ)して。伊勢(いせ)へはいらさる。加茂ハ人皇(にんわう)五十二代嵯峨(さが)天皇(てんわう)御宇(ぎよう)に。今(いま)宮(みや)のお紫野(まへむらさきの)にて禊(みそぎ)ます。伊勢(いせ)ハ清和天皇(せいわてんわう)の御時。在原業平(ありはらのなりひら)朝臣斎宮(さいくう)に恋のりしより絶(たえ)ぐ也。加茂ハ人皇(にんわう)八十三代土御門院(つちみかどのゐん)。元久元年(げんきうぐわんねん)より是絶(たえ)しとかや。おほかた子(ご)といふも此絶風(よう)なかりけり

○尼御前(あまごぜ)

人皇四十八代称徳天皇(しようとくてんわう)を始(はじ)とす。孝謙帝(かうけんてい)の重祚(ちようそ)ならは。法基尼(ほうきに)と号(がう)しまする。是比丘尼(びくに)御前といひまゐらする。そのゝち優婆塞(うまそう)女(よういゑ)の

住宅二位の尼。通照院を建て住まつる。是を尼寺といふ。天子の御母淑子剃髪の女院姉宮といふ。皆尼御所といふ。ゆゑに寺と御号ばかりにて住まつる。何くれ御所といふ

○内侍

女官の名也。長橋局白薗内侍殿を伝奏と。位三位の人おほし

○典

是は内侍の次ぎの官也大きい公卿の御女也

○おとゝ名

内侍典侍の外役人の女中なり

○乗女

天子の陪膳なり也。古今りづくさの大君後り楊弓法皇といて。いとおもしろ叫られべ。

来女土器として。清香山うぶぎちえこれをこの
井のあさくら人をはやしめりて。後て。ゆづく
法を公つきて。国の守くこばやりぎまうり
こゝやゝ天れ法門の中府。来女者紙こゝ者
ゝて。楼沢の池よ身を投こぶ。ゝれとこゞ
紙ぐこれぐ紙ちゝこいの。池ゝ中ゝ見るぞ
うれゝ。ゝ絵ぐゝ人とうう

○女嬬

めのわらはもゝ内侍の下ばらひよ百人ばゝ。
續日本紀よ宝亀三年正月ふ。住法王水内郡
人女嬬となる是けゞめゝゝゝ

○半

いだきの俗ゝいゝゝれく。ゝの是ざうゝゝ
はゝゝゆゝ。ゝ半年一年あれゝゝゝう

はまもりも。和泉式部。本にもあるべし。竹
のもとあるべつの身さへ。はやしにこそぬぐべきなれ
やとよめる。ほとゝぎすの声をもきくなりけり也

○公卿室

摂政関白の妻北の政所とゝ。是たゞそ
らゝゝ大臣公卿の妻を北方といふ也。涉
玄不女官内飲食をもつかふ。平人い住をば。
是ゝ准じて公卿の妻をもいひなしいきをも也。
将軍家い大臣の列ゆへ同ぐゝてをう

○公卿女

をゝぐゝふと爾ゝてゝ。こ信こ信の内侍を上
爾ゝてゝとりたゞゝ公卿の女を詰ふ上
爾ゝていとなり

○神祇室

社務神主祢宜祝部氏人社人の別あり。
公家にあらず地下也。武家にあらず長袖なり。
神社ハ宗廟上古の祖神なれバ上ハ政
道より除目下へハ渡世にいたるまで崇ゆく
氏人をして守らしむ。出家の墓地を守るに
同じ。其妻たるハ平人にひとし。されども伊勢
八幡加茂のたぐひハ。天子将軍家へも女
奉れバ。采女の例に同じき也

○神子

巫女ハ唐にも日本にも神をまつる女にて。夫を
祝部といへり。吾朝にてハ倭姫の餘風也

○武家室

夫の位階にしたがひ。和泉式部周防内侍の
たぐひハ格別なるべし

○大名女

又り宮をもちゆ。夫を打くい其信階よる

○園御前

法候い勅命よりく欲田紙制とるゆへ。

妾をそてはくもあり。本多義仲乃巴

山吹を石はもてそぐいや。又園の妾とゆゞ

わんかんらして。園御前あるもて

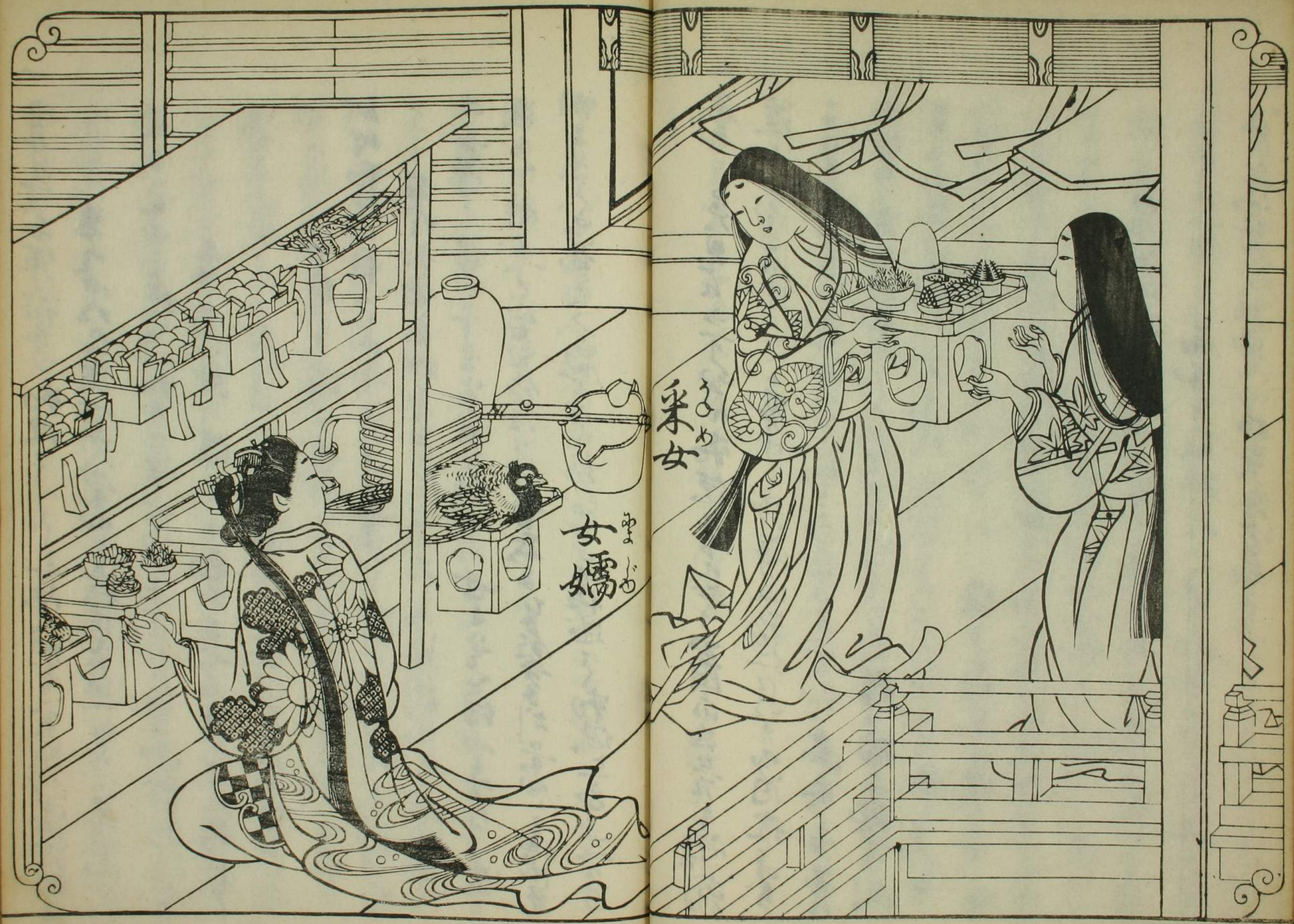
典侍

内侍

彼の女中充
あまごぜ
尼御前

おかるこ
ゆきえん
女官

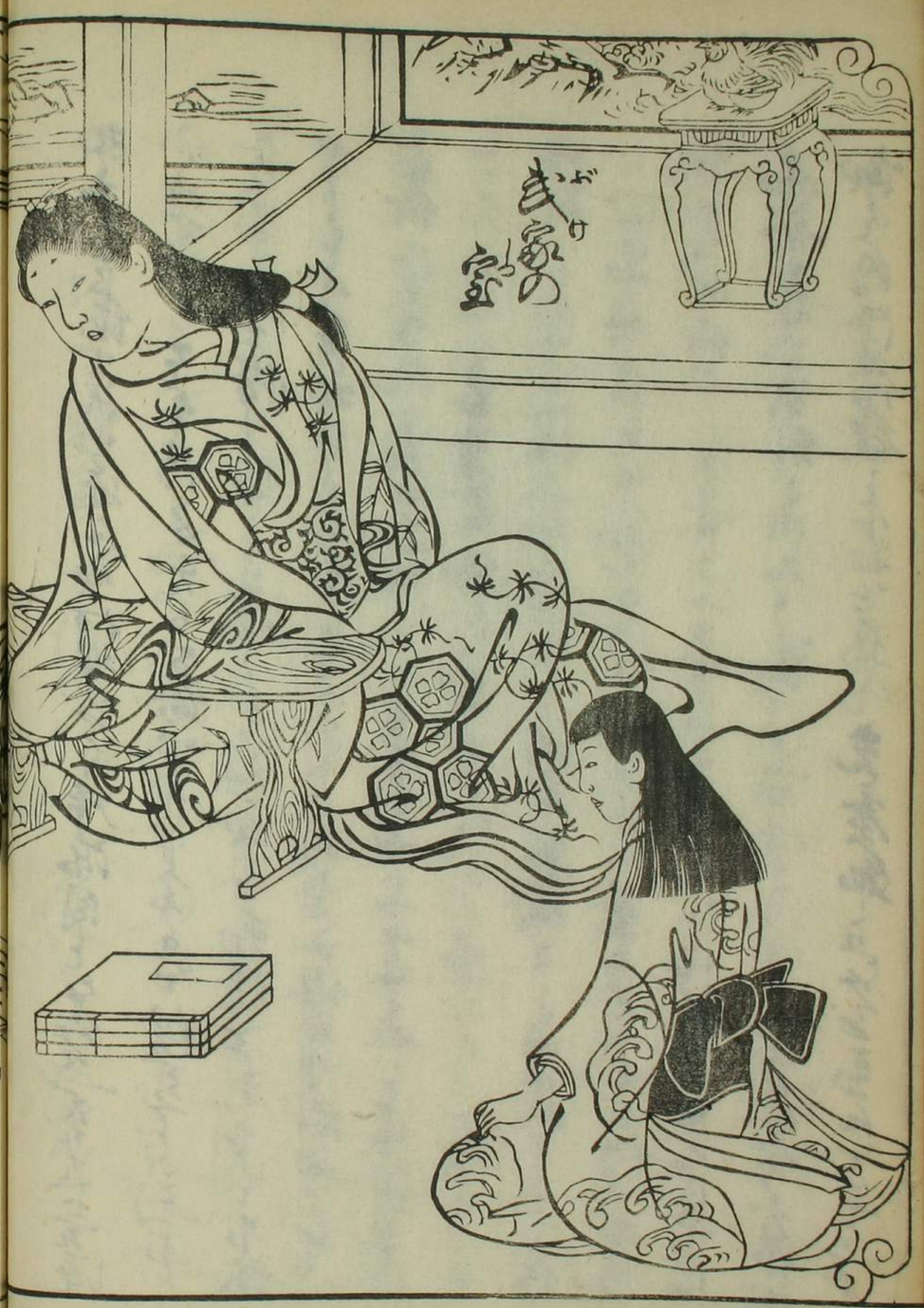
くるまの方
公江家
かうで
乳
姫君
女中


采女
女嬬

楢女房

神職の家
神子
下女
姫

大名の姫君


武家の妻

大名
くだぢ
囲ひ者

女殿達

女らしゃ

お髪掻

お抱師

女ゆひつ孫孝

舞子

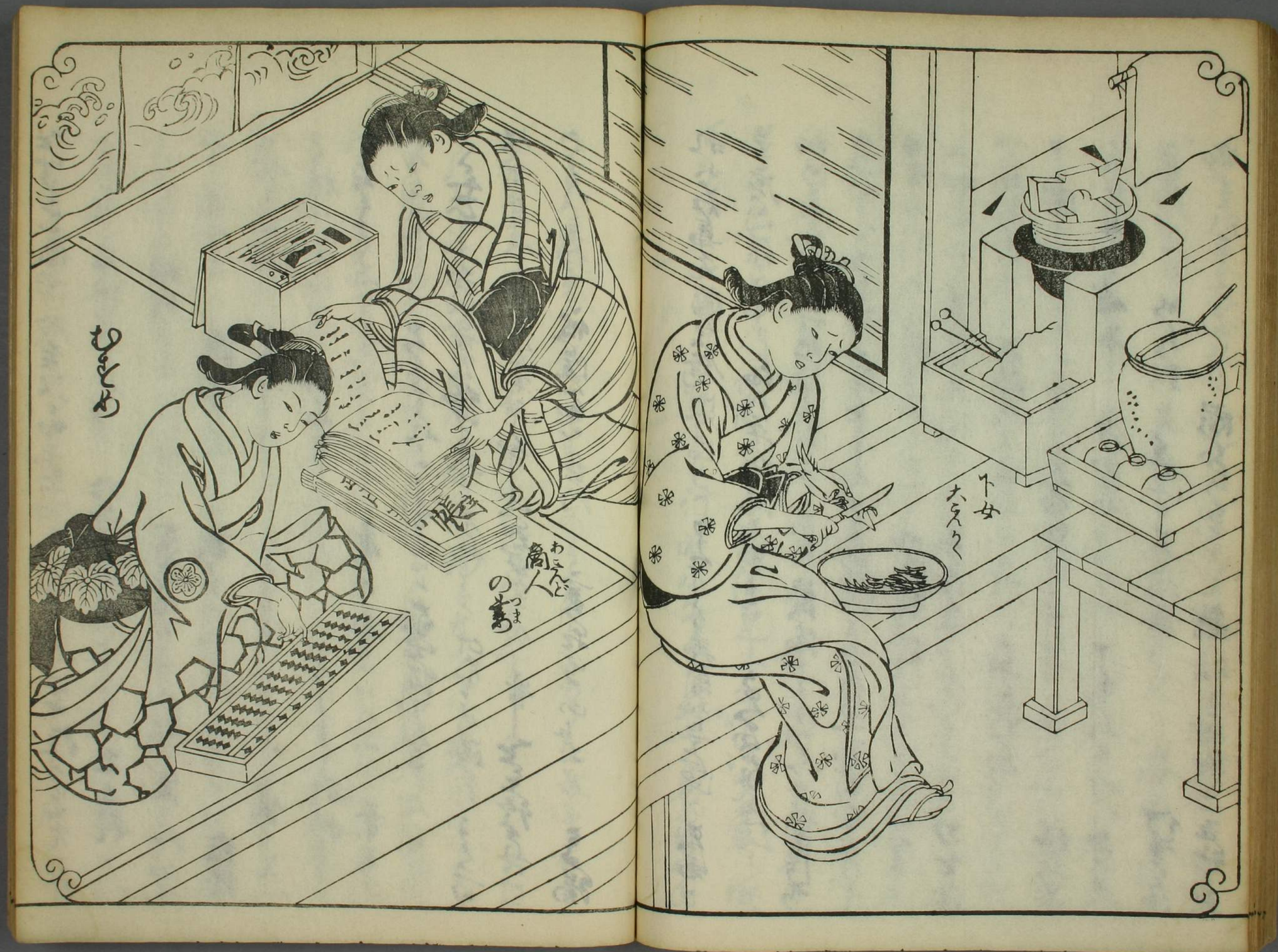
芸妓

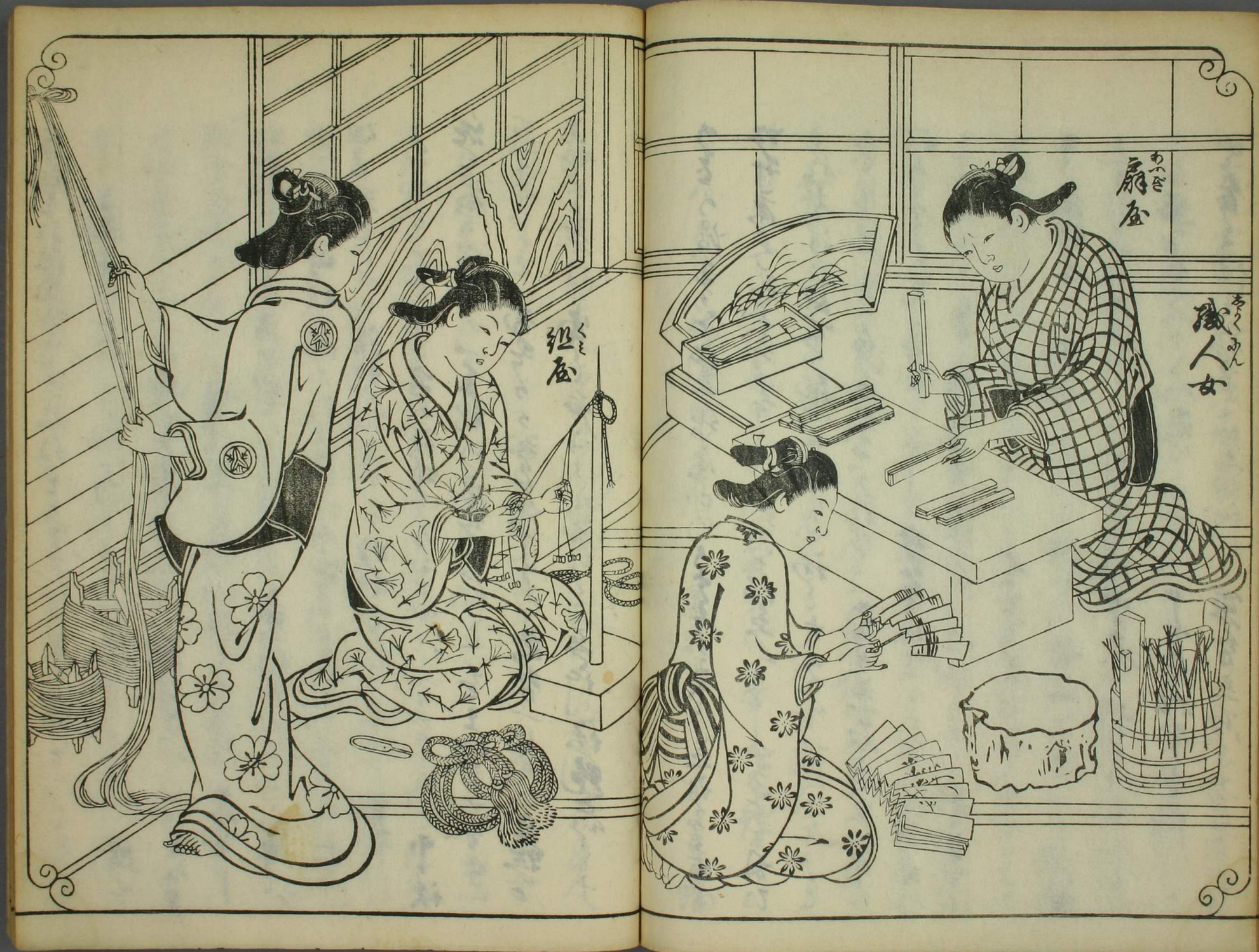
町人
ぎゃん一つ
上方の客

なうの
中居
うらと

有浦人の宝
十種香の神事

町人
中ぶくの妻


下女
たえく
わこうど
商人
の妻


扇屋
織人女
組屋

みこ
ゆい
夢つむぐ

やくしゃ
すまひ
男は角帽、女は角髪、（原制時代の言葉）
物品賣買の仲買をする者
とりもちをする人、なかうど。人間の賣買をする。

衣屋
そうの間
ぬきよ
紡り

いと
繰り
くるまき
ちょこ
ありり

白川
石うり
酒馬
御免

大原の
柴うり

八瀬の
炭うり

百性の女房

○女俳諧　世に此道をたしなむ女多しと雖
ども。丹引らぐらのすた女。近くい其新めづ
○女右筆　いづれも役所にもまうるたよいわ
ゆゑ。すべて女の文章やいと。風雅よくやりの
○舞子　はるゝ花の。はるゝ花の。清の千歳わす
乃おぶうのち義経はけ妾静ゞ母。祇王ゞ
ど紙好きに。今の奇妙ぬいうの絵風こ
○機匠糸繰　人皇十四代安寧天皇れ清原。
唐土より二人の女工をまろ。おやいつあり女
婦をえんられて。後漢と称て。清衣

うまひより。女工のなどれいてれも。若ゞ代を
いつるとめて。流もきれた白川石。矢背や大系
乃紫まる木。彩よ糸をれ。清代の巻
や社いまさ。又穀一粒万倍しまり。百姓ち女
も内紙　納ふめづらしこれぞ
上巻の油